

大垣さんの思い出：田辺湾のお目付役

大和茂之

5月のゴールデンウィークが終わった直後に、大垣さんが亡くなられたことを聞いた。それ以降、なにかが抜け落ちたような感覚を抱いている。白浜に住み始めて以来、畠島のこと、田辺湾の環境のこと、実験所のことなど、大垣さんならばどのような意見を持たれるだろうかと、常に意識して来たように思う。これからは、直接・間接を問わず意見を聞くこともなくなったという感慨でもある。

私が白浜に住み始めたときと、大垣さんが田辺に住み始めた時期とは、ほぼ重なっている。私のパソコンのファイルを検索してみると、いろいろな大垣さんに関連する項目が見つかる。それほど多くのことをご一緒した訳ではないが、いくつかのことは決して忘れることのない印象や記憶として残っている。

番所崎や畠島の調査に参加したことは、長い伝統のある調査に加えて頂いた気持ちだった。そのときにいろいろ学んだことは、磯観察などで他人に説明するときに利用させてもらっている。潮間帯のいろいろな貝類の同定などは、そういう機会に直接教えてもらったからこそ、理解できたことも多い。タイワンタマキビをはじめとして、大垣さんに直接教えてもらった貝の同定のポイントのいくつかは、今でも思い浮かんで来る。

香港からタマキビの研究者が訪問したときに、大垣さんが選んだ紀南の地点を一緒に回ったことがあった。そのことが縁で、コビトウラウズに対して新しい学名として、*Peasiella habei* Reid & Mak, 1998 が提唱されたときに、Tokioka (1950)で報告されているコビトウラウズの卵塊の名称 *Littorina-capsula habei* が、命名上の先取権に引っかからないか、応答をしたことがあった。このあたりの経緯について、命名規約上の問題点とからめて、どこかに文章を書くことを大垣さんに相談したことがあった。しかし、最終的にまとめるところまで至らずで、結局は発表しなかった。

大垣さんとの間でのなによりも大きな出来事は、竹之内さんと私が行った「畠島でのアマガイの放流実験」に対するやり取りだろう。その結果は、Argonauta 誌に公表されている。そのときには、アマガイの放流実験を主導したのは竹之内さんであり、なぜ私のところへクレームが来るのか不満でもあった。さらに、そのやり取りが、Argonauta 上のやり取りと違っていたら、いつのまにかインターネットにも公開されていた。結果的には、実験所員としての畠島の管理や、田辺湾の生物相の変動について、自分なりに考えることになった。

田辺湾の生物相の変動について、有機スズを含む防汚塗料の使用が主要な要因となって

いるのではないかと考えたことがあった。すなわち、TBTO が 1990 年に禁止されて以降、田辺湾内でいったん消滅した生物種が、1990 年代の半ば以降に回復傾向であることは、大垣さんたちがまとめておられるデータなどからも読み取れた、大垣さんが全面的に賛同してくれるものと思っていたら、他の要因も考慮に入れるべきとのことで、慎重な反応が返ってきたことは、意外なことだった。

亡くなられる直前に、番所崎の調査をまとめた論文が、実験所の Special Publication に投稿されてきた。病状のことを全く知らなかったので、生データのみで、Discussion がまったくないことを訝ったりもした。なぜ生データのみを提示するのか、別の論文で議論をするにしても、どのようなことを考えているのか示唆しておいても良いのではと思ったが、いったん方針を決められたのならば、修正されないだろうなと思いつつ、コメントを返した。

さらに、今年の 4 月のはじめに、番所崎調査に参加しないかと、久しぶりのお誘いを受けた。そのときにも病状のことはまったく知らなかったので、お断りのメールを書いた。これまでの番所崎のデータは出版されたことで一区切りでもあるし、今後は大垣さんとは別に独自に田辺湾の生物相の変遷を考えていくつもりだとの趣旨のことを書いた。これが最後のやり取りだった。

思い返せば、大垣さんの意見を伺いたいと思いながら、賛成してもらえと思ったことで反応が芳しくなく、思ってもいなかったところから批判を受けていた。思いつきをあれこれ話したものの、やりかけのまま完結していないことが多くて、途中から相手にしてもらえなくなったのも仕方のないことと思っている。

Argonauta 誌で、私や実験所のことに、皮肉や当てこすりを書かれていたことについても、気にならないはずはないので、重たいものとして受け止めていた。畠島の管理のことでも、事情の受け止め方や見解の違うところもあったが、Argonauta に書かれていることは、常に気になっていた。

5 月末に、大垣さんのお姉さんから、亡くなる少し前の写真を頂いた。また、8 月はじめの実習で畠島へ行ったときに、眞鍋さんと出会って、大垣さんの散骨の場所を教えて頂いた。大垣さんはいなくなっても、畠島に足を踏み入れるとき、また田辺湾の環境について考えるとき、大垣さんの鋭い眼光に見つめられているものと思っている。私のなかでは、いつまでも田辺湾のお目付役として。

(やまと しげゆき・京都大学瀬戸臨海実験所)